# Death Call

流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅａｔｈ　Ｃａｌｌ

【Ｎコード】
Ｎ２５１０ＢＡ

【作者名】
流星

【あらすじ】
その電話に出たら死ぬ――最近噂されるようになった通称「死の電話」。高校生の佐藤裕也は死の電話について調べていると偶然あるサイトを見付ける。そこの掲示板には次に死ぬ人物…友人の名前が書かれていた。
次々と起こる奇妙な変死事件。そしてついには裕也に死の電話が…
…

# プロローグ

誰もが寝静まった深夜。いつもと変わらない日常？果たしてそんなものがあると言うのか…？
今この瞬間、いつもの日常は少しずつ変化をしていつもの日常ではなくなっていってることに誰も気付かない。だからこそ……

「17日午後18時…」　右手に持つ携帯から聞こえる謎の男の声。
その声は生きているのかもわからないほど感情がなく、無機質なもの。
「さっきからなんだよお前っ！」
携帯を持つ青年が電話の相手に向かって怒鳴りつける。
青年の名前は「斎藤一樹」高校時代に犯罪を犯し学校を中退。以降は改心もせずに夜の街を仲間と飲み歩く毎日を過ごしていた。

今日もいつものメンバーで飲み歩き、自宅に帰る途中だった。激しい雨が降る中、携帯の着信音が耳に入る。
「あんだよこんな時間によぉ」
時刻は深夜2時。
多少のイラつきをおぼえながらも一樹はポケットに入っている携帯を取り出す。辺りに人気はなく、蛍光灯の光だけが周囲を照らしていた。
携帯を開くとすぐに疑問の声があがった。
「何だこの番号？」

画面に表示された番号は一樹の知るものではなかく非通知。この時点で飲み仲間ではないことがわかる。一瞬切ろうと考えた一樹だが、静かに通話ボタンを押した。

「もしもし…？」

恐る恐る喋りかける。

「１７日午後１８時…」

「あぁ？」

電話に出たのは若い男のようだった。

「１７日午後１８時…」

「誰だよあんた？何で俺の番号知ってんだ」

一樹は素直に疑問を相手にぶつけるが…

「１７日午後１８時…」

電話から聞こえる言葉に変化はない。何を言っても返ってくるのは同じ言葉を次第に一樹に苛立ちが見え始めた。ついには右手に持つ携帯に向かって怒鳴りつける。

「さっきからなんだよお前っ！」

すると突如相手の言葉が途切れ静寂が辺りを包んだ。聞こえるのは雨の音だけのはずなのに不思議と自分の心臓の音が聞こえる。

それから何分たったのか…もしかしたらまだ1分も経過してないかもしれない。一樹は再び携帯を耳元へ持ってくる……

「１７日午後１８時…」

やはり携帯から聞こえる声は変わらない。

「だからそれが何だってんだよっ？」

「……」

「何とか言えよっ」

「オマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌ」

一樹は思わず悲鳴をあげ携帯を投げ捨ててしまう。今あいつは何と言った…？

１７日午後１８に俺が死ぬだって？１７日といったら２日後のはず…

「気味悪ぃイタズラだぜ……」

道に投げた携帯をそっと拾い上げる。

「あれっ？」

画面に表示されていたのは仲間と撮った画像。履歴も確認したがさっきの番号はなかった。

昨日と違う日常。

今この瞬間、呪いは始まった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2510ba/

Death Call

2012年1月6日13時53分発行